

のは網漁・細形で小孔径のものを釣漁による「おもり」としている。）

このように、孔の大小も漁法に差異を生じると想定してもおかしくはないであろう。

房総半島においては印旛・手賀沼周辺遺跡からの球状土錘の偏在的な出土。利根川下流域・東京湾沿岸地域・九十九里沿岸地域などの大形土錘の出土は、明らかに漁方法の差異を示しているものであろう。それは、波の荒い海洋か、比較的波静かな湖沼などの漁法の相違によるものであろう。

以上のように、弥生時代以降の漁撈活動の一端を出土土錘で見たいが、房総半島においては出土例は非常に多いようである。しかし土錘のみでは漁撈活動の全ぼうは明らかにされ得ないであろう。今後は、民俗学による検討及び現用例等さまざまな角度から検討を加える事が必要であり、これらの検討がなされれば、弥生時代以降の漁撈活動は明らかにされてくるであろう。

(4班・空港事務所)

文

- 1) 漁網用の「錘」とする説の他に編物、織物などの工作的用途(名取武光 昭35)も考えられる。
- 2) 漁撈具全体からみると一部分を構成するいわゆる部分品的な存在である。言い換えれば、これら部品の複合体が漁撈具である。
- 3) 現用例では陶器、鉛なども使用している。

註

- 1) 渡辺 誠「縄文時代の漁業」 昭48
- 2) 金子浩昌「貝塚出土の動物遺体」 昭57
- 3) 大野左千夫「有溝土錘について」古代学研究 86
- 4) 世界考古学辞典 上 昭54

- 5) 野中 徹「弥生文化期から古墳文化期における漁撈活動」上総博物館研究紀要
- 6) 山武考古学研究所年報 No.1 昭56
- 7) 千葉県文化財センター 千葉東南部ニュータウン14 昭58
- 8) 千葉県教育委員会 「佐原市神田台遺跡」 昭53
- 9) 銚子市教育委員会 「銚子市野尻遺跡」 昭53
- 10) 柏市西町761-3
- 11) 柏市船戸矢船1519他
- 12) 柏市布施字山ノ田台
- 14) 千葉県教育委員会・千葉県文化財センター「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I」 昭52
- 14) 小台遺跡調査会 「小台遺跡調査報告書」 昭56
- 15) 「大明神原遺跡調査報告書」 富津市大字岩瀬字大原
- 16) 「上野塚古墳」 上野塚古墳発掘調査団 昭57
- 17) 勝浦市松部字下長者519
- 18) 千葉県都市公社「阿玉台北遺跡」 昭50
- 19) 「網漁具」 高瀬増男 海文堂

参考文献

- 大野左千夫 『三世紀の考古学』中巻 昭50
大野左千夫 「石錘についての覚書」古代学研究 86
江藤千萬樹 「弥生時代末期に於ける原始漁撈聚落」上代文化15 昭48
渡辺 仁 「所謂石錘について—先史学に於ける用途の問題」考古学雑誌55-2 昭45
剣持輝久 「三浦半島における弥生時代の漁撈について」物質文化19 昭47
樋口清之 「日本原始漁撈の一問題」物質文化 森 浩一 「古代産業(1)・漁業」『産業史』1 体系日本史叢書10 昭39

佐原市吉原三王遺跡出土遺物について

池田大助・澤野 弘・岡田光広・矢野紀子

1. 遺跡位置及び立地

吉原三王遺跡は、佐原市吉原字天ノ宮に所在し、下総台地の北端を区切る利根川まで約2.5kmのと

ころに位置する。周辺の台地は樹枝状に発達した谷にかなり開析されており、台地の平坦部はあまり広く残っていない。当遺跡は利根川の支流・根本

川の2本の支谷に北西から南西と北側から東側を区切られた吉原の台地上にある。調査区域は台地中央部から北東及び南西の小支谷にぎざまれた台地縁辺部にのびた面積8,850㎡の細長い区域である。今回紹介する遺物の出土した地点は調査区域の北東端の台地平坦部にある。また、この地域で重要な意味をもつ香取神宮は西隣の台地に所在し、1.3kmの距離を測る。

本遺跡は主として11～12世紀から中世初頭を中心とする集落跡であると考えられる。今後の調査の進展により古代後期～中世初頭にかけての集落発展の実体、あるいは在地地主層のあり方、古代荘園の存在なども広く考える内容を提示し得ることが出来るのではないであろうか。(澤野)

2. 検出遺構の概要

遺構は台地北側、先端部より約20mの位置に所在する。周辺はまだ未調査の住居跡、あるいは柱列等がかなり複雑に入り込んだ一角である。表土から遺構面までは約50cmで耕作により中間の暗褐色土部分がきわめてうすく、現状では掘り込みは浅いものとなっていた。プランはほぼ方形で一辺は約90cm(三尺幅)、コーナーではやや丸味をもっている。

遺物は鏡、合子と並んでおり、その下面から鉄製品および碗が出土した。鏡は鏡面を上にし、合子は検出時蓋がわずかに浮いていたが、状態とすれば蓋と身は一体をなしていた。内容物は特にみることは出来ず、含まれていた土は遺構覆土に比べやや黒っぽくみえた。鏡に関しては布(絹か)とも思われる繊維が周辺にちらばっているのがわずかに確認された。

鏡から約15cm離れて短刀が出土した。先端部を北に向けて置かれていた。鉄製品(鋏、毛抜)は鏡の直下に埋置されていた。比高をみると、短刀、鉄製品とも同一レベルであり、これらを置いたあと、布に包まれた鏡を埋納したものと考えられよう。なお、碗は鉄製品類を壙底に直に置くのではなく、それらをのせるように用いられたと考えてよい出土状態であった。(池田)

3. 出土遺物の概要

和鏡(図3-1)

和鏡は鏡面を上に向けて発見された。各部の計

測値は、径10.88cm、縁高0.65cm、縁幅0.22cm、重さは110gである。鏡面は平面で、縁はわずかに外傾する。色調は全体に青緑色を呈し、錆も少なく、拓影からもわかるように細部まで鮮明である。鏡胎は薄く、鈕は高さが0.55cmと低い菊座鈕である。界圏は細い単圏で径7.8cmを測る。

鏡背の文様は、菊座鈕を中心に雀と思われる双鳥を左右に配するが、それぞれ天地逆となり、地文となる山吹文も鈕をはさんで上下で方向が逆である。これは隔鈕反対飛交と呼ばれ(註1)、文様を二方向から見られる二面式構図が採られているからである。

以上のように、主鑄文となる山吹文と双鳥により、本鏡が平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて多く製作された「山吹双鳥鏡」であることがわかるが、本鏡のように細く低い単圏は平安時代後半期に製作された鏡に多く見られる特徴である。

佐原市内では山吹双鳥鏡は本鏡の他に、市教育委員会により調査された玉造上の台遺跡からも一面出土している(註2)。その文様構成は、菊座鈕を中心に、三方に山吹文を配し、一方に対向する双鳥(雀)が接するように描かれる固定対向式(註3)と呼ばれるものである。

碗片(図3-2)

現高4.3cm、推定口径16.0cmを測る青磁製の碗で、全体の約1/6が現存する。鋏、毛抜の直下から内面を上にして発見されている。色調は全体に淡い暗緑褐色を呈し、器面は非常に滑らかである。器内外に櫛目描による文様が施されている。

青磁は、中国宋代に浙江省龍泉窯を中心に製作され、中でも南宋代に龍泉窯でつくられた青磁は砧青磁と呼ばれ、日本各地から相当数発見されていることをつけ加えておきたい(註4)。

合子(図3-3・4)

合子は和鏡に隣接して、蓋を閉じて正置された状態で発見された。身が青白磁であるのに対し、蓋が銅製なのは興味を持たれるところである。青白磁合子は、口径4.8cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測り、形状は平形で、身の側面は型押しによる菊座形を示す。

青白磁は影青(インチン)と呼ばれる青味のある白磁で、北宋時期に中国江西省景德鎮窯で盛んに製作されたものである(註5)。しかしその輸出は、12世紀の南宋時期に入ってからが著しく(註



図1 遺跡位置図

6), 日本での発見例は平安時代後半期より始まった経塚营造に際しての副産品(註7)としてが多い。

銅製蓋は、厚さ1mm前後のもので2ヶ所に紐を通していたと思われる孔を有する。全体に青緑色

の錆で覆われ、縁の一部が欠損している。また、縁の一部には平織の絹布と思われる繊維痕が付着しているが、和鏡等と同じく絹布に包まれて埋納されたものであろうか。本来は蓋も身と同じくらいの大きさの青白磁が用いられていたはずであり、



図2 遺物出土状態

銅製蓋は青白磁製蓋の代用として日本で製作された可能性が高い。(岡田)

鉄製品(図3-5~7)

5は、鋏で全長13.4cm、刃長5.9cm、把長7.0cmを測る。後端が「U」字形のバネになっており、両枝の内側に刃をつけた掘鋏式のものである。握部の後端から中央にかけて幅0.2cmと薄いのが、中央から支脚にかけて徐々に厚くなり断面は正方形に近くなっていく。刃および握りの一部に平織の目の細かい織物が付着する。

6は、毛抜で全長7.7cm、把長7.1cm、握幅0.2cm、合せの部分は0.45cmを測る。バネは「U」字形をしており、握りは内側に向かって徐々にすぼまり、先端は合せの部分に向い急に細くなる。後端および合せの一部に木質が、握り、他方の合せの一部に平織の目の細い織物が付着する。

7は、短刀で全長24.8cm、刀身長18.2cm、身幅2.3cm、棟幅0.4cmを測る。鋒先にかけてやや外反しながら徐々に幅を狭める。関は両側に存し、いずれもほぼ直角に切り込まれる。茎は尻に向けて徐々に幅を減じ、関部より約2.3cmの位置に目釘孔がある。木質が茎部、刀部の関近くに若干遺

存し、刀の一部には目の細かいものと粗いものと二種類の織物が付着する。(矢野)

4. 小結

吉原三王遺跡は、現在まだ発掘調査中であり、その集落の持つ性格についても明らかにされない部分が多い。そのため、遺跡全体の中における本跡の位置づけは後日再考を要するが、ここでは既に述べてきたような遺物の概要をもとに、本跡の持つ性格とその問題点をまとめておくことにする。

本跡において最も重要な点は、その出土遺物が一辺約90cmを測る方形で浅い掘り込みから一括して発見されたことである。遺物内容からだけでも、これらの遺物がある目的を持って埋納されたものであるということが容易に理解できる。和鏡、合子、短刀等のセットは、一般に各地の経塚から経典を納めた経筒に伴ってその副埋品として発見される場合が多い。本跡からは、本来経塚埋納品の主体となる経筒の検出はないが、本跡出土の青磁碗が破片であったことを考えれば、本跡の検出面より上部が既に削平されてしまった可能性もあると考えられる。また、本跡のように埋納品の中

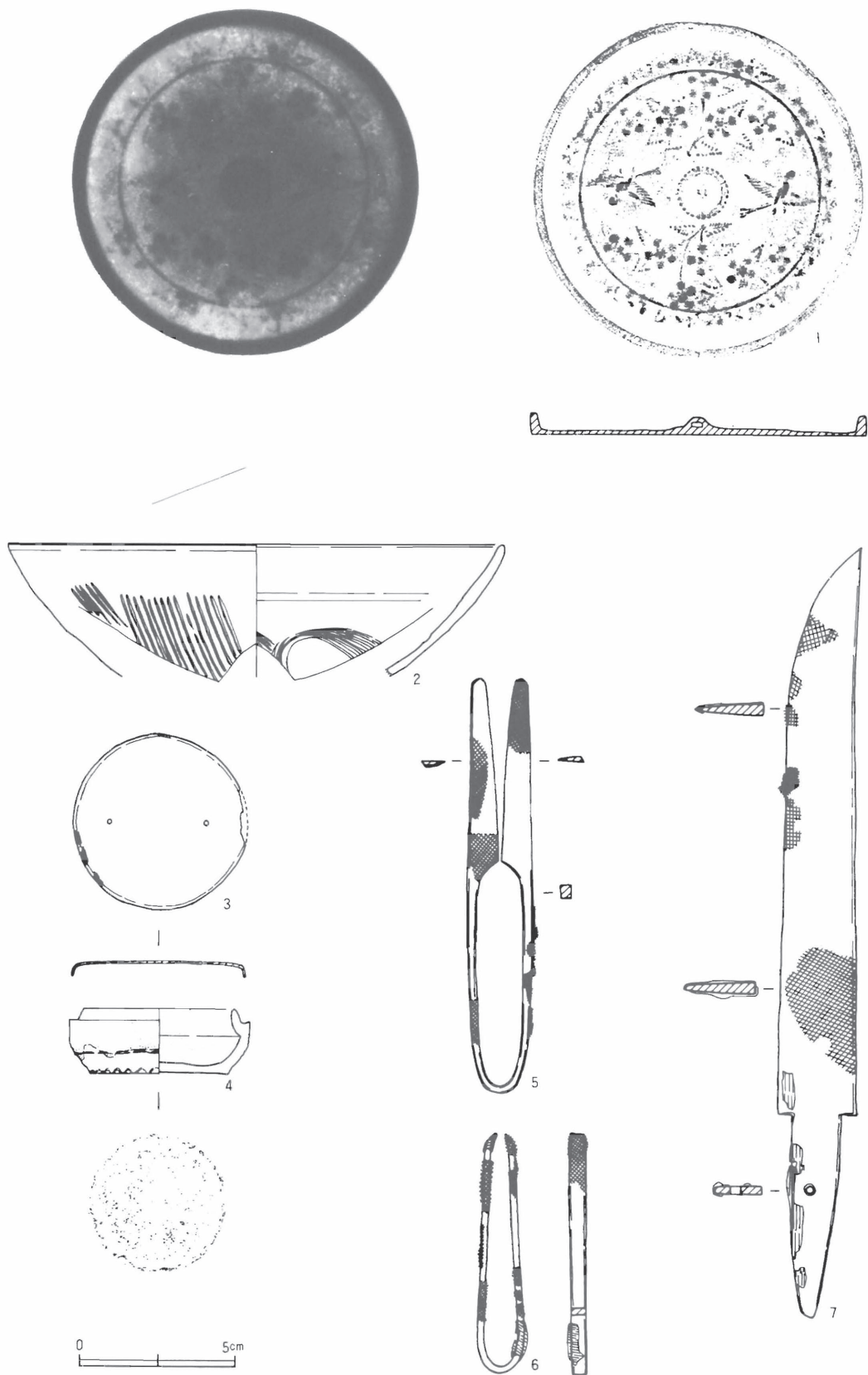


图3 吉原三王遺跡出土遺物実測図(1/2)

に経筒が存在しない例に対して、竹製経筒の存在を検討する必要があるとする意見もあり（註8）、ここでは一応本跡を経塚として扱っておきたい。

次に、その埋納の時期について考えてみたい。出土遺物の概要に述べたように、和鏡、短刀、鋏等の国産品は、その製作年代を概むね平安時代とすることができる。そのうち比較的製作年代の限定される山吹双鳥鏡は、平安時代末期頃の製作、毛抜については、経塚以外でさえ出土例を聞かないが、古くとも平安時代末期以降の製作時期であろう。中国からの舶載品である青磁、青白磁については、いずれも宋代に栄えた窯で製作されたことは明らかであるが、青白磁合子に見られる型押しという大量生産のための技法、及び青磁碗片に見られるやや暗い緑褐色の色調は、その全盛期の生産とするよりも、下降期に属するものと思われる。この時期は、日本は平安時代後半期から鎌倉時代初期にかけての頃であり、それ以後に営造された経塚は、宋磁だけでなく、他の副埋品も減少する（註9）とされるので本跡出土の遺物を経塚副埋品として扱えば、その埋納は少なくとも鎌倉時代初期までに行なわれたものと思われる。

加えて、経塚としての本跡の地理的な位置づけの問題がある。経塚はその遷地を、平安、鎌倉時代においては、寺社境内に求める場合が多く、言うまでもなく宗教的、信仰的色彩の濃い場所に営造される。そのため今後の調査では、神仏習合思想に基づく神宮寺院跡の存在も考慮されるべき問題であろうし、経塚以外から発見される宋磁について検討を加えることで、国内において、宋磁を出土する遺跡の性格がいくらかでも限定されるものと思われる。

以上に述べてきたように吉原三王遺跡では、今後更に当該期集落の性格を明らかにする中で、その社会的背景についても言及されなければならないが、今回の遺物発見はその先導的な役割を果た

すものである。（岡田）

今回の報告にあたり、遺物の実測、採拓は、高橋（博）、栗田、矢野が、トレースは矢野が担当、その他、6班全員の協力があつたことを付記する。（池田）

（6班・東関道事務所）

註

1. 広瀬都巽『和鏡の研究』角川書店 昭49
2. 五味美里「千葉県佐原市玉造上の台遺跡出土の和鏡」、『考古学ジャーナル』220号 昭58
3. 註1に同じ
4. 小山富士夫『青磁』陶磁大系36. 平凡社 昭53
5. 出光美術館編『近年発見の窯址出土中国陶磁展』 昭57
6. 矢部良明「宋元の輸出陶磁」、『考古学ジャーナル』217号 昭58
7. 経塚は經典を主体として、埋納された場所であるから、經典以外の埋納物は副埋品、副納品、もしくは伴納品などと呼ばれる。
8. 三宅敏之「経塚」、『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館 昭49
9. 蔵田蔵「経塚出土の宋磁」、『世界陶磁全集』10 昭30

参考文献

- 三宅敏之「経塚の遺物」、『新版考古学講座』第6巻 雄山閣 昭52
- 三宅敏之「経塚」、『日本の考古学』VII 河出書房 昭42
- 蔵田蔵「経塚の諸問題」、『世界考古学大系』4. 平凡社 昭36
- ※図1は、山澄元「香取社領と水郷」『地形図に歴史を読む』第五集 昭52. 6の図を参考とした。

ツウヘイヂ 廿五里地名考

鈴木文雄

はじめに

ツウヘイヂ
千葉市廿五里城跡の発掘調査は、昭和58年2月

から同年6月まで調査部の大原正義氏と筆者が調査にあつた。遺跡の名称は現在の小字名から命